

本を選ぶ

NO.402 2018年(平成30年)11月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

- <ろん・ぼわん>アカンサス 続々
- 司書の眼 第34回
- 歴史的な大変革の時代に本格的な大型本
- 蔵書票への憧れ
- 言葉より紙そのものが語りかけてくるブルーノ・ムナーリの本

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

アカンサス 続々

住まいの引っ越しは、手許の本を整理して処分する好機だ。埃を払いながら、忘れていた本や読まずにそのまま眠っていた本を眺めていると、入手当手を思い出したり失念していたり。頁の間から何十年も前の走り書きや書きかけの手紙が出てきて苦笑したり、首をかしげたり。

こんな場面では新しい本から処分したくなる。結局のところ古い本がいつも残る。既に入手しにくい、あるいは大きな図書館にしかない、それなら残しておくか、という流れだ。では、雑誌のたぐいはどうだろう。特集雑誌以外は、ほとんどの場合、雑誌の中身がまるまる必要なのではなく、残したいのはその一部だから厄介だ。今風ならば、該当部分を画像化してアーカイブする、つまり電子化するというのがスマートな対処の仕方なのかもしれない。しかし、それでは何かが違う。

近藤芳美の随筆集『アカンサスの庭』の冒頭でアカンサスにまつわる話を書いた、と言及している雑誌をウェブで検索してみる。都立中央図書館が所蔵するとわかって、念の為電話で問い合わせる。すると、該当の号が見つからないとの答。なんと、たまたまその号だけがないとは。図書館の雑誌所蔵でバックナンバーの欠号は痛い。はて、

困った。

結局、あちこち探し回った『詩学』1951年7月号は埼玉県立久喜図書館にあった。早速出かけて現物を確認する。合冊製本されていたせいで、あまりに分厚くなったのどがあまり開かず、コピーをとるのは難しい。写真を撮ってもいいと許可が出た。ただしシャッター音が周りの利用者に迷惑だからという理由で、別室に案内される。ここでお気兼ねなくどうぞ、と司書はにこやかだ。やはり図書館はありがたい。

歌人は、「ギリシャ古建築の柱列の模写」を大学の授業で課された折りに「地中海岸の雑草」アカンサスについて教えられた、と述べている。コリント様式の柱頭彫刻のモチーフとして「ギリシャ人が生活の周囲にある雑草を用いた」、とも。また、自宅の庭の「大根の葉っぱみたいな」アカンサスは、土屋文明にもらった苗が繁茂したものだったらしい。

「ギリシャの野のどこにでもある」(『ヨーロッパ古寺巡礼』饗庭孝男 著/新潮社/1995年)アカンサス紋様が、コリント式の柱頭を起源としてその後の西欧中世の宗教建築に様式として受け継がれていくさまを、饗庭孝男が説いている。ロマネスク建築の修道院中庭に見られる回廊の柱頭には、唐草のひとつとしてギリシア由来のアカンサスの葉が頻繁にあしらわれているという。

庭の端っこのシラカシの根本から新たに芽を出したアカンサス・モリスの株は、すでに40センチ以上にもなる青々とした葉をこれ見よがしに広げて、むしろ冬を楽しもうとする気配だ。(埜村 太郎)

司書の眼 第34回

リーディングスキルテストとシンセティック・フォニックス

鷹野 祐子

NII (国立情報学研究所) の新井紀子先生が書かれた『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』(東洋経済新報社) は、新聞雑誌等でずいぶん話題になったし、いろいろな賞もとり、あれ? この本は2018年だったのか、と思うほどおなじみの本だと思う。東ロボくんが「意味」を理解しないことや、最近の中高生のほとんどが東ロボくんより読解力がないこと、読解力のない子どもたちは将来大人になったときにAIに職を奪われてしまうことなど、ほとんど常識になってきた。その後新井先生は、この読解力のなさの原因と対策について着目し、教育のための科学研究所 (<https://www.s4e.jp>) の活動をしている。東ロボくんを開発する過程では、センター試験の科目それぞれに専門家チームが生まれ、大学入試を突破するAIの研究がされた。東ロボくんは偏差値57を獲得したが、東大には合格できなかった。しかし、その研究を通して、人間の基本的読解力を測定するためのテスト「リーディングスキルテスト」が開発された。

「リーディングスキルテスト」は、教科書、新聞記事、辞書・事典等に載っている文章において、文脈から意味を読み取る能力を測定する。たとえば、「問題文：仏教は東南アジア、東アジアに、キリスト教はヨーロッパ、南北アメリカ、オセアニアに、イスラム教は北アフリカ、西アジア、中央アジア、東南アジアに広がっている。問：オセアニアに広がっているのは()である。4択問題」のように、知識は必要ない。文章から読み取るのである。確かに、この能力は、社会に出てから必要とされるマニュアルや契約書の解読に必要となる。

「リーディングスキルテスト」は、11段階に読解のプロセスを分け、そのプロセスごとに「つまづき」を見つけ出す。そのなかでも、「係り受け」という考え方が大事なようだ。つまり、「美しい水車小屋の乙女」という文章で「美しい」のは、「水車小屋」か「乙女」か、を判断できる力である。この「係り受け」をAIに判断させるのは大変な労力が必要な

のだという。今のところ人間にしかできない能力、つまりAIに置き換わらない能力と言える。

同じようにMIM (Multilayer Instruction Model、多層指導モデル) というのがある。これは、普通学級において利用されることを目的としたアセスメント、MIM-PM (MIM-Progress Monitoring) を提供している。学習が進んでいくにつれつまづきが顕在化する子どもを、つまづく前の段階で把握し、指導につなげていく。特に特殊音節(促音、長音、拗音、拗長音)を含む語につまづいた子どもは「勉強嫌い」になってしまいがちである。この特殊音節のつまづきが顕在化する前の段階で、予防的に支援していくのだそうだ。

Jolly Phonics の研修

特殊音節につまづきを持つ子供は、その後中学校から本格的に習う英語でもつまづきを持つということが統計的にわかっている。日本語の場合は、他の能力でカバーしてしまった子どもも、英語学習の段階で識字障害を発見される子が多いという。それは日本語と英語の音の最小単位(音素)の数が英語の方が多く、また、日本語のように小学校で簡単な文字からゆっくりと段階的に教育されないことによる。その結果、bとd、tとf、uとvの混乱や、正しい発音ができない。一部の子のように文字から丸暗記できないと学習障害となっていく。こういう特性のある子供たちには、最近の研究で英語の文字(綴り)と音の関係を学習するフォニックスが有効であり、特にシンセティック・フォニックス(synthetic phonics)が有効であるという報告がある。イギリスでは2007年からLetters and Soundsというフォニックスを全小学校で導入している。そのもとになった、Jolly Phonicsは、英語の発音を覚えるのに「多感覚」を重視し、識字障害や学習障害をもつ子どもにも高い学習効果があるといわれている。

先日、自分の発音矯正にもなるかと思い、このJolly Phonicsの研修を受けてきた。丸2日間朝か

ら晩までの合計 14 時間の缶詰で、参加者は英語学校教師、小学校教諭、学習支援員、一般の親と多岐にわたり、北海道・九州はもちろん、海外もジャマイカから参加されていた。公認トレーナーの山下桂世子先生は、イギリスで現役の小学校教師で、特に特別支援級や英語が母国語じゃない子どもたちの指導をしている。数年前から日本で研修を始め、日本の識字教育も大変詳しく、実際に市をあげて Jolly Phonics を導入している小学校もあるという。

就学相談とは

この連載を以前から読んでくださっている方はご存知の、「教室にいられない子」のその後の話。入学式の騒動後、教育巡回相談の結果、担任の先生がその方面に大変詳しい方だったので、いろいろ勉強させていただき、知り合いの臨床心理士や発達支援員などにも相談して、先日就学相談なるものを受けた。就学相談とは、障害や発達上の特性がある子どもが、普通学級が適しているのか、普通学級に在籍して特別支援教室へ編級するのか、また特別支援学級や特別支援学校が適しているのか判定するもので、親の要求（相談）によって教育委員会の「就学相談調整会議」という会議で判定される。会議の前には、調査書への記入、子どもの行動観察、親の面談があり、その後、特別支援学級設置校の校長・教員、教育委員会職員（指導主事・心理士）、都立特別支援学校・関連施設の代表者、特別支援教育に精通した専門家（医師、言語聴覚士など）が話し合いをして、「この子にはここがよさそう」という判定をする。特に就学前の子供たちは、年長の秋の健康診断などでこの就学相談をして、年明けに学校が決まる、という流れである。すでに在校児の場合は、その都度相談できるようだ。

とはいっても、お役所なので、年度で予算が決まっている。担当する先生の数も年度単位なので、秋に予算要求して年度明けに加配されるということらしい。会議の回数も決まっていて、一緒にいた親子は 20 人くらいだったのだろうか。よく言われるのは 10 人に 1 人の子が発達障害だが、住んでいる市の小学

校 70 校を考えると、もっと多くてもいいような印象である。

実際、学校の教室で授業をサポートしていると、教室の中には 30 人学級に 3 人はウロウロしたり課題をしていない子がいる。それは統計通り学年が上がってもそれほど割合は変わらないと思われる。そういう子どもたちがすべて必要なサポートを受けているか、というとそうではなく、あくまで保護者の要求（相談）によって支援がされるので、支援を希望しない保護者の子どもにはサポートはつかないのである。そこが、学級運営の大変なところで、その 10 人に 1 人をきっかけに学級崩壊や先生の精神疾患につながってしまうことがあるらしい。先生の指導力も確かにあるかもしれないが、授業に求められるものを決めているのは国である限り、学校現場での対応は限定的であると思う。

Do The Hokey Pokey

実は、あらかじめ就学相談の日程を電話と文書で通達されていたのに、1 か月日にちを間違え、担任の先生にも間違った日を伝えていた。しかし運のいいことに、ちょうどその日は授業の付き添いで学校にいたのである。授業中に面談に来てないという連絡が入り、慌てて早退させタクシーで面談会場に到着した。「間に合ってよかったですね」と子どもは集団観察に連れていかれ、私は面談後待合室でまっていた。子どもの観察が終わると、終了なのだが、慌てて学校から直行してしまったので、もうすぐ学校から帰ってくる長女が家のカギを持っていないことに気がつき、大慌てでとんで帰った。そして、会議の結果はその日の夕方の電話と後日郵送で通知されるのだが、なんとその結果も聞き間違ったらしく、翌朝担任の先生に結果を伝えたら、驚いた担任が副校長先生に伝え、副校長先生が教育センターに伝え、めぐりめぐって、また私に電話がかかってくる、正しい判定がやっとわかったというおまけ付きであった。フォニックスの研修の翌日だったと言い訳しつつ、こんな特性は子どもたちに遺伝しているかもしれない。（たかの ゆうこ：医学系研究所図書室）

歴史的な大変革の時代に本格的な大型本

扱木 敏男

先が見えない時代になった……といっても、もう30年くらい経っているかもしれない。しかし、あと100年も経てば、いま私たちが生きている時代は「大変革」の時期として呼ばれるに違いない。19世紀初頭の産業革命・ナポレオンと近代の夜明け、20世紀初頭のフロイトやロシア革命や相対性理論、そして21世紀初頭の現在。世紀が変わってしばらくした時期に、必ず人間の考え方そのものを揺るがす変革が起こってきた。もっともこれは、亡くなって久しい独文学者の種村季弘氏の言葉だ。

いうまでもなく、現代の大変革とはコンピューター革命で、それに伴う情報通信革命、バイオ革命や環境革命なども含めてさまざまであるが、何かかどてつもなく大きく変わりつつある中に私たちがいることは実感できる。だから、私たちが歴史の中でどのような位置にいるのかを見定めなにかぎり、より正しい進路を見いだすのは困難だ。

ところが、日本はいつのまにか歴史を大事にしなくなったように見える。歴史を知ろうとしない、歴史を無視する、歴史の特定の分野にしか興味のない……私たちは自分だけが孤立して生きているわけではない。自分を産んだ祖先がおり、祖先がいた時代があり、そういうものとつながっている。刹那的に生きたら、そういうつながりを遮断し、意識しないことになる。つまり、ますます先が見えなくなる。過去と歴史は、私たちが生きる根拠と意味を示唆してくれる土台であり、乗り越えるべきものであり、かけがえのない手がかりだ。

弊社が歴史に取り組む今年の収穫をご紹介しますと思う。

まずは、9月に刊行した『ホモ・デウス』(上下巻)で、前著『サピエンス全史』(上下巻)で人類の歴史を鮮やかに斬ってみせた刀で、著者が近未来の人

類を描いた傑作である。これから人類はどう歩むのかという問題を歴史的な土台を踏まえた上で展開していて、非常に歯ごたえのある人文書である。ホモ＝人類、デウス＝神、つまり長い歴史の中でついに神になりうる人類の行く末である。本書をどう捉えるか、書評に限らず多くの議論が起こることが期待される。



次に、10月刊行の『日本200年地図』(本体9200円)は、副題に「伊能図から現代図まで全国130都市の歴史をたどる」とあるように、主要130都市(161地域)をそれぞれ江戸後期(伊能図)、明治大正、昭和(前期と40年代)、現代(以上、国土地理院地形図)に分けて比較する画期的なオールカラー「歴史地図」である。各都市の時代変遷がわかる。地図研究家の今尾恵介氏による監修で、入手困難な地形図を多数掲載した。この地



図帳で見えてくるのは、誰もが驚嘆する都市の変容だ。鉄道や道路の普及、急速な市街化と田畑の縮小、海岸埋立ての拡大、日本軍関係施設の消失など、日本が歩んだ近現代の歴史を地図で詳細に追うことができる。

最後は、11月刊行の『旅と冒険の人類史 大図鑑』(刊行記念特価本体9000円)で、人々の「移動」から世界の歴史を見る大型のヴィジュアル図鑑である。古代から現代まで世界の戦争、交易、探検、文化などによるさまざまな「移動」が文明の原動力だったことが詳しく掲載されており、新しい視点によって世界史を捉え直すことができる。

歴史は見る人によって、あるいは見方・切り口によって、多くのものを語りかけてくる。できるだけダイナミックに、正確に、詳細に——これが弊社の大型本の目指すところだ。歴史は考える出発点。これからも、一人でも多くの読者に読んで頂ける企画を刊行したい。(もてぎ としお：河出書房新社)

蔵書票への憧れ

溝上 牧子

蔵書票とは何か知っているだろうか？本の好きな人なら少なからずその存在を見たり聞いたりしたことがあるのではないだろうか。蔵書票とは本の見返し部分に貼って、その本の持ち主を明らかにするための小さな紙片のこと。Exlibris と書かれ、持ち主の名前を入れるのがおそらく一般的で「〇〇（持ち主の名）の蔵書から」という意味のラテン語なのだそう。例えば好きなモチーフを書いた絵に名前を入れ、自分の蔵書に貼り付けておく。本をコレクションなどする人にはたまらない存在ではないだろうか。まあ、本をコレクションはするが、手を加えることに興味がなければそれまでだが。

以前親しくなったアトリエのオーナーさんが銅版画の蔵書票展をするというので見に行ったことがあるのだが、それを見たときから、いつかは私も自分の本に蔵書票を貼って棚に並べられたらと夢見ている。ただ、どの本に蔵書票を貼ったらいいのか迷ってしまう。持っている本全部が大事な本というわけではないから全部に貼る必要はないだろう。

では何に貼るか？ 持っている本は、勉強のための本、小説、エッセイ、健康本、料理本、児童書（絵本含む）、図録、マンガ…と、ジャンルも様々だ。一生とっておきたい本に貼りたい気もするが、どれが一生とっておきたい本だろうか。繰り返し、繰り返し読む本。何度読んでもああよかったなあと思う本そういう本に貼りたい。しかし、一生…と言い切れる本が何冊あるか。人はその時々において気持ちも変化する。大きな流れ、好みはそんなに変わらないかもしれないが、大切なものというのは変わってゆく可能性がある。長い間好きな本だと思っている本には蔵書票を貼ってもいいかなと思う。

例えばこんなのはどうだろう。まず、初めの年にそういう本に蔵書票を貼り、その後は毎年、この本はよかったなあという本に蔵書票を貼り

足してゆく。その年の年号を書いて。そうすると、のちのち自分の歴史をそこから振り返ることが出来るかもしれない。おもしろそう。ただ貼りたい本が現れない年には蔵書票を無理に貼らないことが肝心だ。義務感から無理に選ぶのはよくない。

考えてみると「これはオレの本（蔵書）だ」もしくは「この本はわたしの本（蔵書）」とまで主張したい本。そういう本は実はそんなに多くないんだろうとも思う。だれでも人は、いつか死んでゆく。そんな時にはその本たちは価値を失い、捨てられるかもしれない。たぶん有名な人のモノでなければそうなる可能性が高い。作家や研究者の蔵書は貴重なものも多く、さらにその人が所有していたという付加価値と共に然るべきところに寄付されたりすることもあるだろう。無名人のモノはただ、処分されるか親族の誰か、又は知り合いの誰かが価値を見出したり、形見として引き取るぐらいのものであろう。趣味がまったく同じ人などいはいはしないのだから。

いつか自分が死んでしまって、持ち物を整理処分することがあれば、親族もしくは整理業者の人がやることになるだろう。もしもその時、片付けながら本を開くような人がいたら（おそらく大量の物を片付けるのに追われてそんな余裕はないかもしれないが）、この本はこの人にとって大切な本だったのだなと、ふっと心に思ってくれたら嬉しいだろうなと思う。そしてその本をみて、私の蔵書の一冊を讀んでみようかなとその本が次の世代に繋がっていったら嬉しいなと思うのであった。

もしも死んだらという前提の前に蔵書票をただの一枚も貼っていないのにどこまでも想像を膨らませているのはいかがなものか…。想像力がありすぎるのも問題だ。いつか妄想を現実に実現したいものだ。

（みぞかみ まきこ：湖北社）

言葉より紙そのものが語りかけてくる ブルーノ・ムナーリの本

西山 雅子

イタリアを代表するアーティスト、ブルーノ・ムナーリ。2017年は生誕110周年、今年2018年は没後20周年にあたる今年、国内4会場巡回する日本最大規模の回顧展が催され、現在フィナーレとなる東京・世田谷美術館の展示が開催中だ。

1907年ミラノに生まれたムナーリは1930年代、前衛芸術運動「未来派」の一員として創作活動をスタート。モビールの先駆けとなる初期の代表作「役に立たない機械」を発表し、戦後同時代の前衛美術と密接な関わりを持ちつつも、広告や雑誌のアートディレクターや、工業デザイナーとしても一線で活躍した。コンパソンドーロ賞、国際アンデルセン賞を何度も受賞している。70年代以降の晩年は、子どもや次世代の創造教育に力を注ぐ。

デザイン・絵画・彫刻・映像・詩・著述・教育と実にさまざまなジャンルを横断したムナーリだが、その名を最も世に広めた仕事のひとつは独創的な「本」の数々。出版社から刊行された作品のほか、美術館などで展示された一点ものも含め膨大な数の「本の形をした作品」があり、本の作品だけを集めた図鑑『ブルーノ・ムナーリの本たち』（ジョルジジオ・マッフェイ著／BNN）ができるほどだ。5歳になる息子のために始まった絵本の制作は、のちにさまざまな斬新なしかけ絵本へと発展し、晩年までムナーリをとらえるテーマのひとつとなった。

ムナーリが本の形をした作品で試みたこと、それは本を「読む」だけでなく「見る」「触る」ことによって伝えられることは何か、本の役割とコミュニケーションの新しい可能性を探る、飽くなき実験といていい。日本で最もよく知られているのは『闇の夜に』（藤本和子 訳／河出書房新社）や『きりのなかのサーカス』（谷川俊太郎 訳／フレーベル館）だろう。いずれも折ごとに紙を変えた3部構成からなり、その視覚効果が見事な絵本だ。まず、『闇の夜に』

は、黒い紙で闇夜を、半透明の紙で朝もやを、ざらついた紙で洞窟の岩肌を表現している。2幕目の半透明の紙には、緑の草の陰に黒で昆虫のシルエットが印刷され、ページをめくるたび、もやがかかっていた草や昆虫の影が、だんだんはっきりと現れてくる。3幕目の洞窟探検は、グレーの紙に手でちぎったような不規則な穴をあけたページが重なり、めくるたびに洞穴の形が変わる。ざらついた紙質と相まって手探りで洞窟の中を進む感覚をよく伝えている。『きりのなかのサーカス』もまた、半透明の紙の重なりで霧の濃淡と街の遠近感を表し、霧の街を歩く臨場感を豊かに伝えた絵本だ。途中の色とりどりの紙が使われたページでは、サーカスのにぎやかな照明や喧騒まで伝わってくるようだ。遊び心にあふれた刺激的な視覚体験だが、よく見るとインクはスミ一色しか使ってないことにも驚く。

言葉より紙そのものが語りかけてくる、これらの美しい傑作絵本の新発想はいかにして生まれたのか。背景には1950年代からはじまる『読めない本』というシリーズへの取り組みがある。『読めない本』とは文字がなく、紙の色や形、素材のみで物語を紡いだ本のこと。めくるたびに抽象的なイメージが変化するもので、新作が発表されるごとに、ページの色や形・素材・加工などをさまざまに変え晩年まで続いた。1953年に発表された『読めない本 白と赤』のポスター本文には「(ページの途中で)気に入ったデザインがあれば、気が変わるまで額に入れておくといい」とあるように、見る人が感じたままに眺め、自分なりの物語を想像することも自由である。『闇の夜に』や『きりのなかのサーカス』は、目や手で感じる『読めない本』に、言葉による時間軸が加わることによって生まれた絵本といってもいい。展覧会ではそういった思考の変遷も迎えることができるだろう。 (にしやま まさこ：フリー編集者)



「読めない本」試作／1955年 パルマ大学 CSAC 蔵

ブルーノ・ムナéri展

—役に立たない機械をつくった男—

世田谷美術館 2019年1月27日(日)まで

東京都世田谷区砧公園 1-2 ☎ 03-3415-6011

10時～18時(入場は30分前まで) 月曜休館

*ただし12/24、1/14は開館 12/25、15、12/29-1/3は休館

【関連イベント】

講演会「ムナériの言葉から考えるデザイン教育」

2018年12月22日(土)14時～15時(開場13時30分)

講師：阿部雅世(デザイナー、ベルリン国際応用科学大学教授)

場所：世田谷美術館 講堂

当日13時よりエントランスホールにて整理券を

配付/当日先着140名 参加費無料

『デザイン教本』『かたちの不思議シリーズ』はじめムナériの著作の数々を翻訳している阿部雅世氏が、ムナériの言葉に込められたデザイン教育の本質について語る。

*ほか、関連イベントは1/19も。詳細は世田谷美術館HPで

www.setagayaartmuseum.or.jp

©Bruno Munari. All rights reserved to Maurizio Corraini srl. Courtesy by Alberto Munari